

あそ

8

2020



須賀忠男のBird Note



暖かくなると
我が家の小さな
庭にもやって来る
アゲハチョウ
おなじみさんです

あそ

八月集

佐藤 喜孝

雑詠

夏落葉雌雄のやうなダンゴ蟲

梅干のひと粒乗りて梅雨深む

鰻酒梅雨も更けしとおもひけり

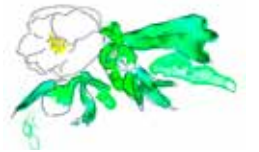
遠吠のしたくなりたる鰻酒

齒磨のあとのコーヒー星月夜

片側の切られた寫眞猿滑

今朝の秋人をおもへばわれのをり

秋の火は三和土のうへで造るかな



東京

田中 藤穂

コロナ鬱

要請の家居に飽きぬ草むしり
梅雨へ開く奈良大和古寺写真集
かはほりと友の指さす北の空
赤いドアの小さなカフェ夏至真昼
日食を見むとて来しに梅雨止まず

三重

長崎 桂子

藤

藤棚や心の内を見る如し
高校の放課後の聲新樹光
身の丈にたんぽぽ残り日の盛り
コロナ禍対策野球テレビ観戦
昼暗し湿度八十五梅雨さ中

東京

森 なほ子

水無月

青梅雨や道も線路も河に添ひ
トンネルの闇を蔵して山茂る
梅雨籠「ハリポッタ」孫に借り
電話切るしばし眼を置く梅雨の庭
我が庭に風力計や青楓

東京

赤座 典子

父の日

吊るされてムーミン乾く五月晴
マスクせず足場組む人大西日
一葉にコロナ禍慎む力欲し
十七才の将棋指し初薄衣
父の日や花束捧ぐ孫娘



埼玉

秋川 泉

青大将

主様や屋根裏に住む青大将
深閑と真昼の道を塞ぐ蛇
真夜中を草取りに行く老女かな
梅雨の月テールライトの帯長く
紫陽花は今真盛り月欠けて

埼玉

大日向幸江

麦秋

万緑の焔たつごと湧き上り
炎天下鉄の臭ひの治水橋
麦秋やゆつくり育ち牛の子は
夏帯をきつく締め上げ宮参り
夕方の客に活けたる月見草

東京

七郎衛門吉保

万緑

万緑の大地を掴みとぶ鳶
万緑の淵ざわざわと魚野川
木々の織る毛氈となるや万緑
万緑やよろづの神の休み処
万緑や大地再生貼る葉

東京

篠田 純子

浜離宮

ウイルス封鎖解け杜若眩しかり
スダジヒの幹に黄色き梅雨菌
迎へ梅雨離宮の濠の水にほふ
汐の引く濠の小魚夏ひかる
すずめポトと直ぐなに降り来迎へ梅雨



「残菊」抄（一）

東京

篠田 大佳

射幸性は復刻せずや氷菓子
パドックで競走馬甘えて酷暑なり
茄子焼く祖母もかつては嫁なりし
香水と感熱紙混ざりて黒し
どうか悪夢を見ぬやうに夏の月

東京

須賀 敏子

梅雨に入る

松蝉や樹海を抜けて富士仰ぐ
老鶯の声のやさしき樹海行く
夏山へ登る日待ちて一万歩
距離をとる日々にも慣れて梅雨に入る
夏服を縫ひあげてまだ自粛の日

雑詠

漣に乗って届けり遠蛙
箒目に迷ふ前進だけの蟻
ハンカチのうしろで笑ふ百日紅
二階から手をのばしたる竹煮草
もうひとつ掌に載す零余子かな

佐藤 恭子



坂上のいぬふぐり坂下のいぬふぐり

佐藤 喜孝

テレワークそつと新茶を淹れにけり

須賀 敏子

夕散歩ホタルブクロとゆきあひし

田中 藤穂

自肅に夏満月大きくうるはし

長崎 桂子

大きな房踏めば弾力杉落葉

森 なほ子

久々の鎖国に美しきフラワームーン

赤座 典子

芍薬のふれたる父の墨衣

秋川 泉

雀の子飛んでたちまち母を呼び

大日向幸江

コーヒーのカップに新茶演歌聴く

七郎衛門吉保

五尺二寸五分の孫の背風あをし

篠田 純子

ケトルまだ熱があるなり夏始

篠田 大佳

おほぞらに風がおきゆく鰯雲

佐藤 恭子

喜孝 抄



けもの径マツモトキヨシとドコモの隙間

佐藤喜孝

六月号十句のうち無季の句が四句。「酢を買って陰を拾うて曲ると家」、「肉賣場つぎは眼のある魚賣場」の三句が続く。これらの句から、作者の最近の行動範囲を、窺い知る事ができる。(吉保呈句：食材買ふ妻の道いま夫とほる)。もう一句は「母の背にゐるは弟夜の空襲」が掲載されている。同じく無季。しかし何故ここにこの句、と差異感を拭えなかつたが、どうだろうか。(吉保)

目の見えぬ子猫のふれる熊のプーさん

大日向幸江

俳句の世界の動物は、なぜ猫と鳥が飛びぬけて多いのだろうか。共働き世帯だった我が家では「ペットの面倒を十分に見る事ができない」ことを理由に、猫や犬を飼育したことがなかった。猫や鳥の句を一度も読んだことがないのは、その所為かもしれない。そして、その穴を埋めるかのように、今でも我が家のソファアには、大きな熊のプーさんが、大きな顔で座っている。(吉保)

金網の米軍基地や揚雲雀

須賀敏子

米軍横田基地を思い浮かべた。以前に清瀬から一般道で八王子方面に出かける折、国道十六号線

に沿って、横田基地を左手に見て走った。金網越しにはあったが、米軍基地の様子をうかがい知ることができた。グーグルマップのストリートビューで確認してみた。何と5km程の金網の全てが、背高のコンクリート板塀に変わり、目隠しされてしまっていた。揚雲雀を探せそうにない。(吉保)

ハルジオオンかたまり咲きて風少し

田中藤穂

野道にある植物を写真撮影し、その写真から検索して、その草花の各種の情報が得られる、便利なスマホアプリを知り、早速にインストールした。アプリ使用第一号となったのが、ハルジオオン。写真を見て、よく見かける花だと知った。春紫苑とか貧乏草とかとも言われることも、知ることも出来た。俳句題材探しの外出には、絶対に手放せない、便利なアイテムになりそうである。(吉保)

嘴のやうな芽を出し杜鵑草

森なほ子

俳句に植物は欠かせない。様々な花や草や木々が詠み込まれる。あを6月号六月集には、無患子・たんぽぽ・花杏・ハルジオオン・芝桜そして作者の杜鵑草。ここでも、藤穂さんの句の欄で触れた、スマホアイテムが大活躍。説明文とともに八枚の写真が掲載されていた。その中の一枚に「嘴のような芽」の写真もしっかりとありました。なほ子さん、咲いた時の句も期待しています。(吉保)

助手席でぬひぐるみ抱き目借時

篠田大佳

六月集の作者の題名は『「新社員」抄(二)』。五句のうち三句は「なるほど」と納得する、題名に違和感のない句が詠まれている。『「新社員」抄(二)』が気になり、先月号を読んでみる。ここでも「なるほど」と納得する句が詠まれていた。表題の句と対をなしているのではと思う「風薫る旅の少女は笑まひけり」と合わせての二句。題名との差異感が、作者の個性であろうか。(吉保)

天窓に猫の乗ったる春の晝 佐藤喜孝

ふと見上げると、天窓に猫が座っていました。高いところの好きな猫が、屋根を伝って、天窓で寛ぐことにしたのでしょうか。下から見えるガラスには、お腹の毛がべったりと、押されているのが見えました。暖かな昼の微笑ましい一時でしたね。(典子)

昼寝した子猫深夜は空を見る 秋川 泉

日中はぐっすりと眠った子猫は、夜はしっかりと起きていて、空を見上げています。猫は夜中に寄り合いをすると聞いたことがあります。その子猫は、町内会に声が掛かるのに備えて、昼寝をしておいたのではと、憶測をしてしまいました。(典子)

ロックダウンありやなしやに花万朶 篠田純子

新型コロナウイルスの発覚以来、パンデミック、クラスター等々、聞きなれない片仮名語が氾濫

しています。都市封鎖を意味するロックダウンが、話題になっています。この状況に咲き誇っている桜は、過ぎし日の賑やかさを思い起こして、寂しがっているでしょうか。それとも何があっても咲き続けるのが桜なのよと、私達を勇気づけてくれているでしょうか。(典子)

入学の帽子のあみだ正さるる 定梶じょう

小学校の新一年生の帽子には、ゴム紐が付いているので、この句に詠まれている帽子をかぶっている一年生は、中学生の男子でしょうか。ちょっと人とは違うことをしてみたい年頃、でもしっかりと直されてしまいました。次は別なことに挑戦ですかね。(典子)

身を守る身支度行き交ひ花見かな 長崎桂子

今年は二月あたりから、誰もが、なるべく戸外へ出ないように、心がけていました。例年通り桜が見頃になると、やはりお花見に行きたくなります。少しの間でも出かけるために、帽子、マスク、マフラーと、支度が大変です。出先ではみんな同じいでたちで、知り合いの人も区別がつかえません。皆が、思い思いの花衣でゆったりと、お花見を楽しめる日を心から願います。(典子)

穂の芽は陣中見舞小諸より 赤座典子

四月締切の作品。東京がコロナ・ウイルスで動きが取れなくなっていた頃。小諸から送られてき

た穂の芽。息詰まった東京の暮らに風穴を開けてくれた。まさに陣中見舞。東京は四か月経った今もコロナ・ウイルスとの戦いが続いてゐる。(喜孝)

春 嵐 二 転 三 転 暗 転 す 七郎衛門吉保

春の嵐に駐輪場でよく自転車横倒しになってゐるのを見かける。段ボール箱が路上を転がってゐることもある。二転三転である。ここまではさういふ景を想像するが掲句の締めは「暗転す」である。実景句ではない句に転回す。何事かが悪い方に転がったやうだ。どんなことだったのだらうか。読者の想像がここで止まってしまうのは残念。(喜孝)

麦茶とアイスクリーム

長崎桂子

令和二年六月四日の昼間に気温三十度、湿度七十%を越え急に真夏になり其の暑さは六日間も続き翌日は梅雨に入る。
暑さ対策は麦茶をお湯で出し常温で飲み、時々アイスクリームを食べます。
住居は二階も東西南北の窓を凡て開けて風通しをよくし昼間は殆どエアコンは使用しません。但し来客のある時、そして夕方から夜分は存分にエアコンを利用します。



佐藤喜孝



田中藤穂

海風にほどよく揺らぐ罌粟の花
明日すべきことのある幸夏の星
雀に餌目高に餌させて自分にも

○「ほどよく」に働きがある。「海風」が句を凡庸にしてゐない。
○同感です。眠りにつくまえの夏の星を眺めて一日のをはりとするのである。
○家族へのための料理なら「餌」といふ言葉は浮かばぬが、自分一人の食事の用意となると「餌」に近い感じになってしまう。たはむれに云はれたのだが、この「餌」は滑稽であるが淋しい。

長崎桂子

沸点百お茶の時なり揚羽蝶
梅雨籠アミロペクチン気に掛けて
御田植祭中止こころ痛しかな

○近頃の桂子さんの俳句文法(?)はおもしろい。自分の表現したい言葉を直接ぶつけてくる。三段切れの畳み込む速度感を生かしてゐる。作者は云ひ得て爽快。そのときたまたま飛んできた揚羽蝶が生き生きしてゐる。

○体調を維持することに気を遣はれる。ある歳になると自己の為もあるが周りの人の為といふ心持にもなる。
○まさに桂子さん流直截語法である。

森なほ子

とりあへず今日明日元氣葛饅頭
短夜や雀の喋り容赦なく
短夜のカーテン下に光の蛇

○「葛饅頭」はある齢を過ぎた方の印象があるが、とりあへず明日も元氣と予測できる若さを持つてをられる。
○ここ数年我が家の辺りに雀が消えた。夜の雀の囀、容赦なくといはれるが羨む気持ち私にはある。
○一瞬蛇と見まごう光を認めたのだらう。好きなものに見紛ふより怖いものに見違へるのは困ったものだ。

赤座典子

万緑に切っ先のあり雲動く
桐の花風のびやかに魚野川
日々の無事訝しみつつ新茶かな

○万緑に尖ったイメージを描けないので、万緑の中に切っ先のやうなものを作者は感じたのであらうか。そうでは無ささうだ。

○私の中の桐の花は大方高いところに咲いてゐた。気持ちの晴れる作品だ。

○今のコロナ騒動、日本に限れば後世騒ぎ過ぎだったといはれるかも知れぬが、渦中にあるわれわれはそんな余裕はない。「無事訝しみつつ」である。

秋川 泉

瘤のある大楠樹の夏落葉
コロナ禍や総力上げて田を起こす
雉子鳴けり未来占ふ中学生

○大木は根・幹・枝・葉と目で辿る。見飽きない。見てゐるあひだに樹のどこかから葉が降りかかる。瘤などあれば猶更。

○コロナの影響で田仕事が遅れたのか。村人(?)が総力を挙げて遅れを取り戻さんとしてゐる。

○夢占いで雉子の夢を見ると恋愛運や家族の増えることを意味する大変縁起の良い夢となるさうだ。さういふことであらうか。

大日向幸江

夜の枇杷窓の明かりに黄金色
開放感気持の揺れるさくらん坊
梅雨晴間雑巾掛も又楽し

○当たり前に見てゐたものがあるとき、新鮮に美しく見えてくるときがある。この句も見慣れた枇杷の実のすがいま「黄金色」に見える。

○このさくらんぼは木に成つてゐるのか、お皿の上か。前者のやうだ。気持ちの揺れとさくらんぼの揺れが同期してゐる。

○雑巾掛とまで行かずとも、掃除機をかけただけでも気持ちがい。しかし梅雨の晴間の雑巾掛は掃除機掛と比べると失礼。雑巾掛を楽しめる健やかさ。

七郎衛門吉保

何万枚脱ぐ椿の葉更衣
午前も午後も登校の子等梅雨の傘
疫下には我れ閑せずと庭の墓

○花が終わったところから古い葉が枝から離れる。追ふやうに新葉が陽に照り映えて出てくる。この句の更衣は袷から単衣に変わる季語の更衣ではない。

○このごろ子供の頃の記憶を句にすることがある。吉保さんに「なんで？」と指摘された。この句を読んで又私の回顧癖が出てきた。戦後一二年して小学校に上がった。校庭には校舎はわずかにあった。二部授業といふことで少ない校舎を使い分けてゐた。青空教室もあった。と横道にそれてしまった。掲句はコロナウイルスの影響で三密を避けるための時間差登校のことである。

○確かにコロナウイルスで騒いでゐるのは人様だけで犬猫も桜の花も我閑せずである。とりわけ墓は代表者然としてゐる。

篠田純子

書割めくマジックアワー桜桃忌
増量分溢すシャンプー梅雨深し
自由なのに不安夏のマスクして

○大自然は太陽光で千変万化の変容を見せる。都会も同じく恩恵を受ける。マジックアワーにいつもの街の姿が変容する。太宰治の小説は未読だが、未読なりに太宰の実生活に馴染まぬ人生と「書割めくマジックアワー」が新しい桜桃忌の俳句になつてゐる。

犬病めば犬がだいじや桜桃忌 竹内 弘子
窓の外下駄の音する桜桃忌 田中 藤穂
桜桃忌鳶の翼の五指の見ゆ 篠田 純子
針使ふことを男のこ子桜桃忌 定梶じょう

○詰替用のシャンプーを袋から容器に入替へ作業。案外難しい。油断をするとこの句のやうな仕儀になる。可笑しみの句に「梅雨深し」ととり済ました季語が可笑しみを増してゐる。

○人間は自分の心が思ひ通りに行かぬものだと思つてはゐるが厄介である。「夏のマスク」が意味深長だ。

篠田大佳

あぢさみの濡れる社や坂の上

六月や馬鹿に明るき会議室

六月やモノクロームの壁新聞

○社は大方高台にある。火葬場は大方坂下にある。過日、白山神社での見事な紫陽花を思ひだした。

○外光を大きく取り入れた会議室。会議の議題にはない明るさで戸惑はれてゐるやうすだ。

○「壁新聞（かべしんぶん）」とは社会における情報伝達手段の一つ。通行人の通る建物の壁などに自身の主張を書いた紙片を貼り付けるといふことで、それを社会に対して公開することが目的とされている。」（ウキペディア）。

町の掲示板に町会のお知らせが貼つてある。これは壁新聞とは云へない。掲句の壁新聞は学校や会社の閉じられた社会の人々へのお知らせであらう。イラストもない実質本位の壁新聞。前句は「馬鹿に明るき」でこの句は「モノクローム」で静かに心情を垣間見せてゐる。

須賀敏子

若竹の天へ伸び行く心地良さ

虹かかる東京都から埼玉へ

梅雨深し好きになれない団子虫

○素直な句である。作者の目線といふ感じが薄いのは残念。

○大きな句である。大きいことはいいことだといふCMが昔流れた。何か物足りない。

○子供たちは嬉々として団子虫と遊ぶ。私も最近団子虫の句を作った。行くところがないので近くの公園まで杖を曳く。足の衰へを憂ひてのこと。足元の団子虫を見て句が出来それはそれでうれしかった。今は猛暑でこの散歩も自粛してゐる。



房

木の芽吹く裸像は固き乳房持つ
小さき房残りてをりぬ葡萄棚
子を産めぬ犬の乳房や冬ぬくし
耳かきの秋ゆふぐれの房しるし
三房ほど生りし日除の葡萄棚
ふと触れし乳房つめたし春の風
風うけて馬酔木の房のふれあひぬ
白頭鳥が落してゆきし花の房
制服徽章朱房の喇叭黴の部屋
両肌を脱ぎ子に乳房選ばせる
大皿にただ一房のマスカット
粉を吹いて葡萄の房の実りけり
藤房に激しさはなく人ゆるる
とぶ蝶を眼で追ひ乳房はなさぬ子
春愁や乳房を挟むマンモグラフィ
池の辺の藤の花房五寸ほど
弟へ巨峰一房盆の入
両の手ではさむ乳房の子に新樹
しかと乳房掴まれし夏マンモグラフィ
飯桐の房の実鴉は高く鳴く
春昼や乳房の上にもみぢの手
騎虎のきほひある房残し青ぶだう

栢森 定男
齊藤 裕子
芝 尚子
定梶 じょう
竹内 弘子
須賀 敏子
早崎 泰江
齊藤 裕子
竹内 弘子
篠田 純子
鎌倉喜久恵
須賀 敏子
堀内 一郎
渡邊 友七
篠田 純子
芝 尚子
堀内 一郎
佐藤 恭子
篠田 純子
大日向幸江

一枝一房剪定の青葡萄
喰ひに来よ甲斐が葡萄の房ひとつ
裕子さんとコーラス乳房暖かし
たわわなる乳房をもちてアマリリス
杉の花房もつたり重き昼日中
夫妻
豊の秋熟年夫妻の声はづむ
不在
師不在の会終ふ寒き灰皿重ね
炎天の電柱鴉不在なり
不作
朝寒に不漁不作の郷だより
一生のあるいは不作ちんちろりん
塞ぐ
夜の秋コールガールは道塞ぐ
葉桜や塞ぎの虫のつきまとふ
信号に塞かれてゐるよ千歳飴
信号が塞いて白息同じうす
踏切に塞かるるひとり雪女
両手今塞がつてをり大根干し
臯月空國から届く口塞
ふさぎ
夏のアルパカ頭のみさきふさぎ逆下せまいか

大日向幸江
井上 石動
篠田 純子
大日向幸江
秋川 泉
長崎 桂子
渡邊 友七
早崎 泰江
関口 ゆき
定梶 じょう
篠田 純子
堀内 一郎
定梶 じょう
定梶 じょう
定梶 じょう
大日向幸江
佐藤 喜孝
篠田 純子

不思議

春日和人の縁の不思議かな
不思議さよわらび萌えくる縁の下
針箱に耳かきがあり不思議な冬
夫といふ不思議なるひと暮の秋
月あかり桜の魔力摩訶不思議
お茶の花今日在ること不思議かな
清しさと不思議をかもし滴れり
般若湯とは摩訶不思議秋の宵
牛車が不思議乗物好きの雛の客
綿入れの不思議な匂ひ染緋
ABCの和不思議の国の冬日差し

富士

相州の富士へかむさる卯浪かな
白き富士段々畑に桃の花
昏れのこる富士に白月仄とあり
括られし桑富士山を遠景に
たをやかに裾曳く富士や野菊晴
人日や富士見坂より富士見えず
富士塚のてつぺんにある蟲の穴
蝦夷富士から北斗市へ時雨模様かな
雪の富士少し離れて雲の湧く
遠富士に親子も犬も立ち止まり

芝宮須磨子
田中 藤穂
定梶 じょう
竹内 弘子
森山のりこ
須賀 敏子
長崎 桂子
佐藤 恭子
赤座 典子
須賀 敏子
七郎衛門吉保
井上 石動
河合 笑子
鎌倉喜久恵
栢森 定男
関口 ゆき
後藤 志づ
佐藤 喜孝
篠田 純子
秋川 泉

病室の冠雪の富士拝す朝
初富士に見下ろされぬて子ら遊ぶ
五月場所北勝富士は大輝くん
鯉のぼり富士より高くおよぎをり
漆黒に二日の富士の鎮まりぬ
大晦日気付けばしんと茜富士
桃色の梅雨雲被る富士の山
汗ばみて頂上に着くお富士山
浮輪浮く富士天辺に雲とどめ
初富士は見へねど御坂峠晴
お茶つみや富士の笠雲雨ずらよ
父の愛せし忍野は雪に富士の山
初冬や夕日は富士を鴉いろに

武士

古武士のごと内野聖陽豆を撒く
春寒や野武士竹蔵炯々たり
克明な武士の家計簿枇杷の花
みちのくの野路野武士のやうな味
藤色を映す川面に花蛇果つ

不死男

百歳の秋不死男展草田男も春一も

松本 米子
森 なほ子
須賀 敏子
齊藤 裕子
赤座 典子
早崎 泰江
大日向幸江
田中 藤穂
渡邊 友七
東 亜 未
藤野 寿子
堀内 一郎
鈴木多枝子
竹内 弘子
竹内 弘子
田中 藤穂
田中 藤穂
田中 藤穂
鎌倉喜久恵
堀内 一郎

温かいお茶

須賀敏子

私は暑さに弱い。エアコンの無い頃、毎年汗疹に悩まされた。エアコンが入ってから、早々と家事を済ませ、汗びっしょりの洋服を着替えてエアコンのスイッチを入れる。冷えた部屋で温かいお茶を飲むのが好きだ。夫は寒がり屋だが暑さには滅法強いので、主に二階で過ごしている。



冷たい牛乳

大日向幸江

かりそめにする物達が私の暑さ対策に。日中は百均で買った水タオル。すぐに利かなくなるがクルクルと風に当てるとまた冷たくなり便利だ。それと扇風機。首を振り涼しい風を送ってくれる。夜は網戸とアイスノン。寝る前の冷たい牛乳は眠りを誘う。こんな簡単な事で夜をやり過ぐす。

沢田研二

秋川 泉

沢田研二の動画を観る。現在もその美声はいささかも衰えていない。危険な香りのする官能的な阿久悠の詞はあの時代に受け入れられた。私は幼稚で分らなかつた。が今、怪しく艶かしい青年に悩殺された。若く絶頂期の彼は、私の魂を引き抜き、もう暑さとは無縁の異世界に誘う。阿久悠の詞の世界は暴力的でくらくらする。息をするのも恐ろしい。しかし、その表現者「沢田研二」の圧倒的な妖艶美。完全にやられた。そして私は、太陽を恐れて、くらくらする頭のまま深夜の草取りに赴く。

井戸

田中藤穂

二十年使っていたクーラーが駄目になってしまったので、今年は止むなくクーラーを買替えた。今度のは掃除も自分でするから私のする事は何もないと云う。家族が車座になって井戸から引上げた西瓜を切って食べたり、富士見坂の向こうまでおやつアイスキャンデーを買いに行つて、帰りは溶けては大変と走って帰ったり、戦前のあの頃がちよつと懐かしい気もする。



あとがき

投句箋

投句箋の様式が先月より少し変わりました。作品数を(五句から八句)にしました。一人一頁で作品欄を組みたいと思います。ご協力よろしくお願します。

郵送

以前は「クロネコメール便」であをを送ってゐた。ある日、集荷人が利用できないと云はれた。そこで「佐川メール便」に切替た。ここまでは荷物の追跡が出来た。A4で厚さ2cm迄90円といふ便利をしてゐた。数か月前このシステムが使へなくなったといはれ(理由不明)別のシステムを提示された。追跡が出来ず値上がりである。これが遅配で中野から杉並に一月かかってしまった。会員様にもご迷惑をおかけしてしまつた。これからは日本郵便で送ります。

猛暑・残暑・熱中症

拙宅の標高は38米。年初からパソコンを一階から三階に移した。45米位になつたか。冬は今まで寒くて手

当てが大変だったが、移つてからは暖かく気持ちよく作業できた。ところが夏になつたら一転した。黙つてゐるとデジタル温度計が38度を示してゐる。クーラー漬けである。クーラーは疲れる。なければもつと疲れるが。皆さんの暑さ対策を読むと人生の知恵が働いてゐた。私は初心者。妻が元気な時は台所に入ったことがない。どこに何があるか、電子レンジの使ひ方は?と生活の基礎を一から学んでやつと私のリズムを掴めてきた。しかしこの暑さの対策は一考を要するやうだ。(喜孝)

二〇二十年八月号(3刷)

発行日 八月二十三日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

表紙・佐藤喜孝

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)